ブレーズ・サンドラール小伝（4）

加　太　宏　邦

帰郷が決ったのは1895年末かあけて1896年1月頃だった。身の回りの整理をすませ3月頃、南国に春の萌が見えはじめるある日、ソゼ一家は雪のまだ残るジュラへの帰路についた。

父のジョルジュ・フレデリクが間もなく45歳、母のマリ・ルイズは45歳と数ケ月、長女のマリ・エリザが13歳、兄のジャン・ジョルジュが11歳、そして未来の詩人フレデリク・ルイ（フレディ）が8歳の時だった。

ひとりひとりの胸中はさまざまであったろう。父には失意とそれをねじふせるような新たな野心がふつふつとしていただろう。しかしそれは青雲をいだくというような新鮮なものでなく、かなり手練れた感じの、再出発というぐらいのものだっただろう。母の喜びは十分に想像出来る。故郷へ帰れる、両親の近くに戻れるというだけでなく、せめてスイスでなら、夫をなんとか地道な生活に立ちかえらせることが出来るかも知れないと考えたからである。こんな遠い国、しかもみんなが浮き浮きしているような、歌をうたうことが生活みたいなナポリでは夫は益々だめになる、と思えてしかたなかった。一方、子供たちは生活の変化に胸をワクワクさせていたぐらいのことで、とりたてて何の感慨もいただくことはなかったはずである。

ヌシャテルのドルネ家（妻の実家）をあてにしようとしていたジョルジュ・フレデリクのおもわくははずれた。義父母は娘の一人クレール（サンドラールの伯母）とヴィュ・シャテル街13番地に住んでいたがソゼ一家に対しては同居を許さなかった。とくに義父のヨハネス（ジャン）・ドルネは長らく由緒ある旅館の番頭をつとめあげてきた人だけあって、まことに質朴で堅い人だったから、女婿のジョルジュとはそもそも肌あいからしてちがっていた。それだけでなく相手は実際正業についていないやくざな男なのだから、保護する気にすらなれなかった。顔も見たくないという嫌いようだった。しかし娘や孫たちは可愛かった。そばに居てほしい。

そういう事情で、一緒に住まないが市内にアパートを捜すことには協力した。ドルネ夫妻の家があったヴィュ・シャテル街は市域の東端にある。国鉄の駅をおりて湖への急坂をまっすぐに下る途中の左手で、駅から200メートルほどしか離れていない。にもかゝわらずこのあたりは新開地であった。駅を、城やカテドラルからなるだけ遠くに建てるという考え方は明治の鉄道敷設期の日本人の発想と同じである。ちなみにヴィュ・シャテル（古城）はヌシャテル（新城）より由緒があるところ、という訳ではない。『ヌシャテル市史』によれば17世紀にこのあたりでローマ時代の要塞跡が発見されたことがあったためそう名付けられただけのことであって、市の歴史に直接つながるものではないという。

さて、ソゼ家の人々が住むことになった家はサン・ニコラ通り6番地aに決った。ここは逆に市の西端にあって同じく湖岸よりにあり、これ又、やや郊外という感じのするところであった。今はぎっしり家も建て込み、この通りとレクリューズ大通りとをはさんで、アフリカ資料でその名を知られる「民俗学博物館」（1904年7月開館）なども建っている。

家主は牛乳屋のアレフレッド・ペルヌーという人だった。牛乳屋といっても販売だけでなく製造もしていたらしく〈結核ワクチンをほどこした乳牛から製造したミルクとチーズですから病人の方やお子様の健康に最適です〉などと宣伝をしていた。

ソゼ家とドルネ家のへだたりは直線距離にして2キロ足らず。線路上を馬車が走る、いわゆる軌道馬車が市内に開通したばかりで、これは彼らがこの町にいた頃に徐々に市電に切りかえられていった。それで行き来はたいして苦にもなる道のりではなかった。母は子供たちをつれてよく立寄った。ヨハネスとマリはこの長女の子供たちを可愛がり、ナポリのあれこれを楽しそうに聴いてくれた。しかし婿の方は全くこの家に近よろうともしなかった。表面的には相変らず景気の良い事を並べ立てて陽気なようだったが内心はあせりもあり、妻の思感と反対にヌシャテルではかえってうるさい義父がいて、なんとなく思い切って動けない。要するに自分の行動に義父は足かせになるような圧迫を感じていた。

姉・兄・弟の三人は学校へ通った。姉は創立して10年になったばかりの女学校に、ジャン・ジョルジュとフレディの兄弟は近所の小学校へ通ったのだろう。

ナポリから来てみるとヌシャテルはいかにも小さな町だった。人口でみても20

分の1にもならないくらいだ。2万人やっとというところで、一方ナポリはあの時すでに50万人近かった。

港といっても波止場がせいぜい150メートルくらいの小さなもので、湖の中を行き来する船もまれだった。（ナポリ！　2千メートルもある波止場。あの頃でも年に8千隻、延べ750万トンもの船が出入りしていた港。アフリカへ、アメリカへ、アジアへの大きな窓！）

しかし一方で＜スイスの真珠＞と呼ばれるヌシャテルのこの静けさこそが必要であったひとりのフランス人が同じ頃、ここで神経を休めるため滞在をしていたのである。まだ文壇にデビュしたばかりのジッドである。彼はソゼー家と入れちがうようにして南の国へ旅立っていたのであるが、ヌシャテルについてこういう感想を書き残している。「私は思いをひそめるのにたすけとなるこの閑静な土地を愛した。あのルソーの思い出が今でも徘徊しているように思われるこの湖の慎やかな岸辺ほど、さりげない感じで、いわゆるスイス風でもなくかえって温和で人間らしいところはまたと他にはない。周囲に高慢な高山が無いので、人間の営為を卑んだり、またそれを途方もなく小さなものに見せたりすることがないし、また身近の親みあるかわいい景色を目うつりすることなく眺めていられる。年経た樹木が葦と芦とにおおわれたどこが岸辺か定かでないあたりで水面にその下枝を垂れている。私はヌシャテルで、自分の思い出せる限り、一生のうちで最も幸福な時を過した。」（『一粒の麦もし死なずば』）

ジッドが「一生のうちで最も幸福な時を過した」と述懐したヌシャテルで、しかし、未来の詩人フレディは皮肉なことに人のいのちの地獄を知ることになる。そのことは先になってわたしたちがこの小伝で行きつく先でもある。

まことに静かな町ではあったが、それでもソゼ家の人々が住みはじめた1890年代はヌシャテルの歴史の中でも一番活気に満ちた変化の多い10年だった。この湖畔の町に郵便局が出来たのも、電灯がともったのも、そして市電が開通したのもすべて彼らがここに来た前年、つまりジッドの滞在中のことだった。電話の第一号は1896年、又、種々の中等学校が創設されたのもこの頃のことだった。ついでにこの年の8月9日には、この町でジャン・ピアジェが生れていることを記しておこう。

変化の多い時代に、濡れ手で粟をつかむ事が得意だと自分で信じていたフレデ

ィの父は例によってさまざまな商売に手を出し、しかし、今回も相変らずうまくいかなかった。

こうやって一年が経っていった。母はヴィュ・シャテルの実家へ行っては愚痴をこぼす。父さん、母さん、うちの人の仕事のこと何とかなりませんか、と。そういうたのみごとに、苦々しい思いをしていた父親は何も答えてくれない。ある日、母の方が、たまりかねて、ついに助け舟を出してくれた。本当にこれが最後だよ、と念をおしてバーゼルの知人にわたりをつけてくれることを約束してくれたのである。詩人の母方の祖母のマリはアレマニクで、バーゼルに里があった。縁者や知人の比較的多いこの町にならなんとか職も捜せそうだと思ったからである。

「又、引越し？」聞いても両親は事情を語りたがらない。少年フレディは、定住している人たちがふつうなのか、自分たちのようにイタリア語の国やドイツ語の国へ移り住んでいくのがあたりまえなのか考えたわけではないが、少なくとも移動することは自分たちにとってもはや非日常的なことではないような感じを持つようになった。実際、これからのち、彼は生涯にわたって何十回となく移動をする。ロシアに、フランスに、アメリカに、ブラジルに……。

引越しは夏休みに行なわれた。1897年8月からソゼ一家はバーゼルの住民となる。

「先祖」の大学者オイラーやブラターのゆかりの地であるバーゼル時代のことは、しかし、詩人の創作自伝にもあらわれていないし、「正統」な資料らしいものもごく少ない。

フレディ少年の身におよんだ変化のひとつは、友だちがドイツ語を喋るということであった。呼び名もフレディからフリッツにかわった。で、自分もドイツ語を喋るようになった。ことばが複数存在しているというのは、スイス人の生活感覚に自然にあるもので、フリッツもすぐ慣れることが出来た。手こずったのは、学校でのドイツ語の方だった。いわゆる＜ホッホドイチュ＞は自分たちが生活で口にする＜シュヴァイツァードイチュ＞と異る。フランス語ならヌシャテルのそれとパリのとは（あるいは文字にしたものとは）全くと言ってよいほどちがわない。しかしのちにフリッツが友達に書いたドイツ語の手紙にはbestenとなるべきが

best となっていたり、dir となるべき語が四格の dich になっていたりするところが見られるものの一応ドイツ語はものにしたようである（学校の成績は別として）。少なくとも彼はこのドイツ語を生かして、将来就職に成功することになる。

フリッツははじめの２年くらいは小学校に、あとの３年間は専門学校（レアルシューレ）に通った。当時のバーゼルの地図を探してみると国鉄の駅のすぐ近くにかなり大きいオーベレ・レアルシューレというのがあるがここの中学部（ウンテーレ・レアルシューレ）ではないかと想像される（今日の学制では、この学校は「理科系ギュムナージウム」にかわっているという）。姉の行った学校はわからない。駅の西北にテヘターシューレ（女学校）というのがあるが、ここへ通ったのだろうか。兄についても不明だが、少なくとも彼だけは、実務的な勉強を志してはいない。従って、市内に数多くあるいづれかの普通課程の中等学校へ通ったということだけは言えよう。

フリッツと同級だったパウル・ハーベルボッシュという人によると、このヌンシャテルから来た少年は、普通のおとなしい子供で、どちらかと言うと気も弱く、目立たない生徒だった、と言う。ただ、神経質なため、すぐにカッとしたり、ドギマギしたりすることが印象に残っているぐらいで、とてもあのフリッツ・ソゼが将来のブレーズ・サンドラールと同一人物だとは信じられない、とも言う。

ところで、父はどうしていたのか。一家は市内のヴィンケルリート広場わきのアパートの３階に住んだ。今で言う３ＤＫだったらしい。そこから父は約４キロほど郊外へ出たアルシュヴィルという村の陶器屋に勤めに出たようである。ようである、と言うのは、別の証人がいて、そうではない、あれは酒屋をしていた、と言うからである。どっちでもよかろう。生涯こういう調子の人間のあやふやな職を定めて何になろう。あやふやだった、ということだけで十分である。

バーゼルは当時人口10万と少し、郊外に７万というところ。アルシュヴィルまではこのころ郵便馬車の便があったが、まもなくそれは市電となって同じルートをラインの右岸からミットレーレ橋を渡って町の中心をひとめぐりして国鉄バーゼル駅まで南下し、再び西へ折れアウ通りをまっすぐとってアルシュヴィル村へ行くようになった。この、ドイツ国境から出て、バーゼルを貫通し、フランス国境の村へつながっている「国際的」ルートは90年経った今日でもほとんど変っていない。

バーゼルはヌンシャテルよりはるかに大きな都会だった。しかし、市の中央を水量の豊かなラインが流れ、上り下りの蒸気船がひんぱんに通ってはいたが、なんとなく茫洋とした町だった。不可思議な色彩で飾られた大きな重くるしい建物。どこを歩いても同じようなくらい印象の町並。どこに立っても市内を気持よく見渡せないもどかしさ。13世紀につくられた木製の640メートルの大橋が、フリッツの滞在時に、かろうじて残っていた（彼らがこの町にいた最後の年に石の橋につけかえられた）。この橋は中央に小さなチャペルがある。そこから流れを見下ししていると目が回るような気がする。ナポリでもヌシャテルでも経験しなかったことだ。時々、ラインの右側に立ってどっしり座り込んだミュンスターを見上げるといくらか気が晴れる。ヌシャテルからは晴天の日には、湖を前景にして、はるかかなたに、左からピラトゥス、ヴェターホルン、アイガー、メンヒ、ユングフラウ、ブライトホルン、ディアブルレ、モンブランとアルプス全山がパノラマ状に展開した。ここバーゼルからは視界がすがすがしくひろがる地点が見い出せない。港、それは河川港だが、アントワープやロッテルダムに通じるようになったのは1907年からで、当時はまだ小さな川船が年にせいぜい数百トンこの町まで逆上ってくるくらいだった。何か北へひらいた港はさみしい。

エラスムスと共にルネサンス以来文化の都として、又、交易の町として栄えて来たこの町も、今のフリッツには興味をひくものがあまりにも少なすぎた。ニーチェやブルックハルトがついこのあいだまでこの町の大学で教授として奉職していたということも、もちろん、この子供には何の関係もないことだった。今日ではスイス随一の工業都市として、又、人口でもチューリッヒに次ぐ大都市として知られるバーゼルは、しかし、そのために、一層、スイスらしくない景観を呈した町となっている。それは今世紀のはじめからすでにはじまりつつあった変化だった。国境の町バーゼルを観光客が訪ずれるとすれば、多分、美術館とカーニバルのためであろう。当時からここの美術館は有名であった（今日とは場所がちがうが）。フリッツが自ら観覧に訪ずれたとは思えないが、大人につれられて来たことはあったかも知れない。展示されているのは大方はドイツ・オランダ派の画家のものだったから（当時はまだフランス印象派のコレクションなどは当然入っていなかった）、巨匠がそろってはいたとしても彼のおさない精神にどれだけくい込んでいったかは疑問である。カーニバルの方は、いわゆる仮面行列である。

小太鼓とピッコロの単調な音に合わせて、色とりどりのボロ衣装を身にまとい、考えられ得る限り奇怪な仮面をかぶった人々の行列が払暁から日没まで続く。フリッツがこれに参加したのかどうかわからないが、おもしろさより、むしろ無気味だという気持の方が強かったのではないか。コンフェティを山と投げられて、子供はみんな恐ろしくて、あいまいな顔付をする。家へ帰ってみると、ポケットの中も背中も紙ふぶきだらけ。ひどく寒い凍りつきそうな祭り。

1899年、ヨハネス・ドルネが亡くなった。父を失ったフリッツの母はひどく気落ちしたろうが、父のジョルジュはなんとも言えぬ解放感にひたった。しかし今すぐ動くと、又まわりから何やかや言われる。今しばらくはじっとしていなくてはならない。妻もこうなるとヌシャテルへ帰っても良いと思っているにちがいないが、自分がおとなしくここで働らいている限り何も言い出せないだろう。様子を見よう。

パリの万国博覧会も終りまもなく20世紀になる。時代のかわり目の人々のふわふわした感じに乗じて、又ひと旗あげたくてうずうずしていたジョルジュ・フレデリクはひそかにヌシャテルに戻ってはあたらしい商売を始めるための画策をしていた。ラ・ショード＝フォンでは肩身が狭い。バーゼルは妻の里からの紹介だから、その手前、随分おとなしくしていなくてはならない。第一、スイス・ロマンドで生活した方が、どちらかと言えば肌に合っている。

そうこうしている内に又一年がたち、1902年となった。この年ついに、又、ヌシャテルへ帰れることになった。職を見つけ出したのである。タバコの卸業をする、というのである。小売店だけでなくレストラン、カフェ、キオスク等を精力的に回って得意先をひろげる。ヌシャテルで一番のタバコ問屋になる。久しぶりの事業欲をパンパンにふくらませて大張切りだった。

バーゼルの5年間はなんとなく中途半端な内にすぎ去った。フリッツもフレディにもどる。もう15歳の少年だ。しかし、脳みそのやわらかい時期をドイツ語圏ですごしたことは、フランスの中にのみどっぷりつかった詩人たちとはちがう道を歩むことになる大きな根っことなったにちがいない。

再び引越。今度の住いはフォブール・デ・サブロン29番地。国鉄線のすぐ上の、その名のとうりフォブール（郊外）だった。今はぎっしり家並の続く、市内でも目立つ繁華な大通りになって、名前もリュ・デ・サブロンとかわっているが、こ

の頃は建物もまばらで、すぐ北側までぶどう畑がせまっていた。昔の29番地は今日の「通り」では49番地にあたる。こうのどかな、いわば駅裏通りの大きなアパートにソゼー家は住むことになった。湖が大層よく見渡せる。家の前をベルンとローザンヌを結ぶ汽車が煙をはきながら日に何回となく通った。

姉のマリ＝エリザはバーゼルでも商業の勉強をしていたらしいが、この町へ帰って来たしばらく商店事務員の見習いをしたあとローザンヌへ働らきに出てしまった。会計技能で身を立てたのである。（その後のことは、前にのべたようによくわからない。とにかくラールという歯科医と結婚してドイツのバイエルン地方で1962年80歳で亡くなっていることだけがわかっている。現在バイエルン州の電話帳を調べているが、可能性の一番あるミュンヘンに「ラール」姓は12軒、又近郊の11市町村に１軒見つかっている。しかし、この州は西ドイツ最大の州で、この他にあと11冊の電話帳がある。今のところその調査まで至っていなくて特定出来る子孫は見つけ出していない）。

兄のジャン＝ジョルジュは18歳。ヌシャテル大学法学部へ入学。ただ正確に言うと、ヌシャテル大学はこの時点ではまだ「アカデミ」と呼ばれ、正式の大学ではなかった。1838年創立したこのアカデミは1866年一度改組となり当時に至り、1909年に大学という名に改められたのである。当時も今日と同様４学部（文、法、理、神学部があったが、学生数300人あまりの小さなものだった。今日でもスイスで一番小さな大学であるが、例えば、先にあげたピアジェ（1915年理学部卒）など立派な人々を輩出している。建物は湖岸の全く同じ場所にほぼ同じ規模のまま現在もある。大学と向いあって、もうひと筋湖岸側に高等商業学校があった。

この高等商業学校にフレディは通うことになった。1883年創立のこの学校はやはり学生数300人くらい（手もとの資料ではでは、1899年の冬学期登録者数303人となっているが約10年後の資料では900人となっている）の小規模な学校だった。現在ではスイスのみならずヨーロッパでも有数の商業学校だと言う。

フレディは1902年の冬学期から1904年の夏学期までの２ケ年通うことになる。

はじめの内はきちんと通った。駅の横のガードをくぐりぬけ、ヴォシェル小路の急坂を一気に下るとフォブール・デュ・クレにあたる。そこを渡り、通称ジャルダン・アングレと呼ばれていた公園の中をつき切って行く。途中、木立の中に、可憐な女性の胸像がある。ちょうど20年前の1882年12月20日に21歳の若さで

この世を去ったヌシャテルの詩人、アリス・ド・シャンブリエの像である。彼女の詩をフレディが読んだかどうかはわからない。ただ、彼女の死後出版された、フィリップ・ゴデの手になる詩集＜Au-delà＞（『彼岸』）はスイスでは実に50年間にわたって6版を重ねるロングセラーとなっていたので、少なく共、その名だけは知っていただろう。

公園をぬけると兄の通う大学があり、その先の建物が彼の学校だった。

しかし、1年たつころには、だんだん学校への熱意を失っていった。彼は何をしていたのだろう。ピアノ？ 女友達との交際？ 読書？ どれもはっきりしたことはわからない。ただはっきりしているのは彼がサッカーに熱中していたことだ。競技場や運動場はないので、山すその野原へ行ってやる。物の本によるとイギリスではじまったサッカーが大陸ヨーロッパでさかんになり出したのはこの頃らしく、はじめて「国際蹴球連盟」（ＦＩＦＡ）が創設されたのも丁度、フレディがボールを蹴っていた1904年、それもスイスのチューリッヒでだそうである。フレディが写っている一枚の写真がある。11名の学生選手と1人の監督か引率者らしい大人とが並んでいる写真。上着はユニフォーム、下は半ズボンに長いくつ下である。パナマ帽にネクタイをつけ背広の上下を着た大人の方は落着いた顔をしているのに対して、11人の少年たちはケンカに消耗したドラ猫という顔付きをしている。フレディはキャプテンらしく、前列中央でボールをひざにかかえて草の上に座っている。しかし顔は横をむいている。とても勝いくさとは思えない顔付。フレディのはじめての写真、それはナポリのスクオーラ・インテルナツィオナーレの入口でとったもので、セーラー服を着た坊やの顔は、母親にそっくりだった。彼の顔は写真で追っていく限り、青年時代まで、ぐんぐん母親の顔に似ていく。母のマリ＝ルイズの新婚時代の若い顔付がそのままフレディのヌシャテル時代にかさなってくる。しかしそれから10年くらいすると彼はある種の苦味を持った正にサンドラールの顔としか言いようのない顔にかわっていくのである。

この商業学校時代にはもう一枚写真がある。理科の実験室で撮られたもので、かっぽう着のような長い作業衣を着て仲間たちとカメラの方をむいている。それぞれフラスコを手にしている。どの上着の襟元にも白いカラーが立っていて、この学校にはきちんとした制服があったことがうかがえる。ガランとした実験室にいる8人の学生たちの表情にはひどく気まじめなものがうかんでいる。フレディ

も落着いて、写真をうつされることに真剣にとり組んでいるという顔付きをしている。

しかし、２年目の学年が終った頃には勉学に対する意欲をかなり失ってしまった様子が、1904年７月15日付のその年の成績票でよくわかる。

例えば、一番重要な科目の「商業事務」は（10点満点で）その「成績」が一学期５、二学期５、三学期5.5で、同科目の「（勉学）態度」の方がそれぞれ、4.5、5.5，4.5であった。その他の科目について１年間の平均を算出してみると、次のようになる。（カッコ内は当該科目に対する「（勉学）態度」）「仏語」5.3、（4.1）、「習字」5.0、（3.5）、「帳簿文字」3.2、（3.2）、「速記」5.3、（5.3）、「独語」4.7、（4.7）、「英語」4、（4.5）、「伊語」4.3、（3.8）、「地理」5.0、（4.5）、「体育」5.2、（5.3）、「タイプライター」6、（5）、「実験」5、（5）。又、科目外に「ノート点検」があって、「帳簿」は４、「その他ノート」は4.8、「操行」については4.8、「秩序（整理）」4.7となっている。その全体は限りなく不合格に近い灰色の合格という感じで、「備考欄」に＜進級＞というスタンプが押してあるのは何か奇跡のようなかんじがする。成績票に今少しこだわる。実はもう一葉あって、これは学業成績の不振といわば表裏一体の関係を成している＜操行原簿＞である。これには「欠席・遅刻」、「問題点」、「処罰」の三欄があって、こまかく日付と共に記録がなされている。欠席19回、延76時間、遅刻23回。無断欠席に対する処罰（自宅謹慎又は受講停止）が５回。又「問題点」欄には、＜予習なし＞、＜宿題未提出＞＜怠慢＞、＜粗雑＞、＜規律違反＞、＜不従順＞、＜乱雑＞などありとあらゆる悪評が日付とともに14行にわたって書きつらねられている。

週に34時間（１、２学期）から36時間（３学期）もぎっしり授業があり、たとえ一分の遅れでもきちんと記録され、これが度重なると処罰にまでつながるこの厳しい学校（もっともヨーロッパでは平均的だと思われるが）でかえってフレディ少年はたしかにサンドラールとなる萌を少しづつ見せはじめていたのである。成績がかんばしくなくて落こぼれていくのでなく、学校反逆児だったため成績が悪かったにすぎない、という図式がここに見られるからである。

ソゼー家の住んでいたアパートの一階は学生用の下宿になっていたが、その寮監をしていたエミール・ユリジュ（ヒュリガー）先生がひょっこり訪れて来たの

は1904年の八月中ばのことだった。あの成績票以来、フレディは学校を続ける意志のないことを断固表明するようになった。母親が困りはてていた最中である。ユリジェ先生はやさしい親切な人で「どうだい就職しないか」と切り出した。学生たちのめんどうを見ることを天職のように思っているユリジェ先生のところへは求人がよく来て、これを自分の生徒たちに紹介してやっていたのである。しかし今回は応募する適当な者がないので、お宅に持って来たのだがと言いにくそうにした。フレディはひどく絶望的になった。学校を続けるかさもなくばこの町の商店につとめて会計簿とにらめっこをして一生を過すのか。「僕、いやだなあ」「しかし、せっかくのお話じゃないか」と父がわり込んで来てユリジェ先生に言う「先生、どういう口なのですか」「それが、少し遠くてね。ロシアなのだ、サン＝ペテルスブール（サンクト＝ペテルブルグ）だが、どうかな」「ロシア！」フレディの顔がとたんに輝いた。

どんなに家を離れて遠くへ行きたかったか。「今」を逃げ出しても、その先にはもうひとつの「今」が待っている。ここが城土ならあっちも修羅道、などと言うのはおとなの分別。同じ16歳でランボー少年が「僕は行く、遠くへ、はるか遠くへ」とうたったようにフレディ少年も旅立ち、早や始まった人生のほころびを、はるか北の都でひとつ縫い合すつもりなのだ。

「ユリジェ先生、僕行きます」

（以下次号）